
妖怪軌道永理

明星 幽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪軌道永理

【Nコード】

N1723S

【作者名】

明星 幽

【あらすじ】

まだ世界に異形の者達がいた頃。 対魔学園、たいまがくえん、と呼ばれる、この世に蔓延る「妖」を退治する方法を学ぶ学園のうちの一つに、他とは明らかに異なる学園があった……。これは、優しき妖怪が紡ぐ、人と妖怪、そして神様の物語――。

0 プロローグ（前書き）

何だかだいぶ前に書いてたお話し・・・？（記憶が曖昧w
完全に自己満足作品なので、批評は受け付けません（キリッ
少しでも楽しんでいただけたら、幸いです。

0 プロローグ

妖怪——それは、人とは異なる《生き物》。

人や動物などが死んだ後、化けてでる霊鬼^{れいぎ}とは違い、森羅万象の思いや願いによって生まれる彼らは、時に恐れられ、時に敬われたりしながら、今もこの地で生きていた・・・。

優しき日々と温かな笑顔。

静かな日々と悲しみの言葉。

出会い、失い、繰り返される季節の巡り——。

新しい世に芽生えた小さな命を傍で見守る彼は、今宵、その瞳に何を映し、何を思うのか。

これは——人を愛し、守る事を誓った優しき妖怪の物語^{おはなし}・・・。

1 対魔学園の大妖怪

春——桜の花が舞うこの季節、実に喜ばしい快晴の空の下、新しき新入生を迎えるこの学校の名は『対魔^{たいまがくえん}学園』。

この地に蔓延る^{アヤカシ}妖^{アヤ}から自分の身を守る為の知識と力を学ぶ特殊な施設だ。

毎年近くの村から大勢の生徒が集まる今日は、普段静かな分、一段とにぎわっている。

そんな、世界には何処にでもあるこの学校には、他とは確実に違う理由が、二つあった。

その一つ目と言うのが……

——はらり——

「……？」

自分の目の前に何かが落ちてきた事を感じ、重たい瞼をゆっくりと開く。

ぼやけた視界に映ったのは、小さな桜の花びら。

（ああ、そう言えば桜が咲いていたな……）

まだ正常に起動するまでには至っていない思考回路でそんな事をふと思う……が、次の瞬間には実に滑らかな動きで木製の机に突っ伏した状態から起き上がる。

見た目は十八・九くらいだろうか。

恐ろしく整った顔に、つい先程まで黒色だった髪と瞳がいつの間にか白銀色に染まり、木漏れ日の煌めきを受けて鮮やかに輝いている。

純白の着物は肌の白さを際だたせ、その上に羽織っている美しい模様が描かれた蒼い羽織が見事に空の蒼さと重なっているのはまさ

に奇跡だ。

彼の名は——《はくあ白空》。

他の妖から〃てんま天魔の大妖怪〃と恐れられている太古の存在にして、この対魔学園が他とは確実に違う理由の一つ目たる学園の《守護者》。

「朝、か・・・」

紡ぎ出された言葉は、ひどく不思議な響きを宿していた。

そう、例えるならば空に吹く風の音——ただただ発せられたから聞こえるのではなく、耳を傾け聞こうとするから聞こえる・・・だが、決して音量が小さいというわけでもない。

顔は先程の眩きなど全く無意味であるかのような無表情だが、これでも人間の数百倍は生きている妖怪、やはり時の移り変わりに関しては、少なくとも人間よりは大切にしている。

それが、日々繰り返される朝と言う極めて平凡な現象であっても。

そして、そんな彼だからそこ、とも言える要素が彼自身のすぐ傍にある事は必然的で。

今彼がいるこの部屋は、どこか他とは異なる物だった。

部屋の広さは畳九畳分。

襖の扉に畳の床、部屋の真ん中には木製の机があり、襖の扉の反対側には障子があり、開け放たれている為にその先にある木製の縁側と陽光が見えている。

が、この場はあくまで学園の内の一部にすぎない。

当然学園と言うからには大きな建物なので、木は使っているものの殆どがコンクリートで出来ている校舎に、一つだけ和風な作りの部屋があるのだから、違和感が無いと言ってしまおう方がおかしい。

ちなみに隣にもう一つ同じ大きさの部屋があるが、そこは基本、

夜寝る時にしか使っていない。

・・・最も、妖怪と言う存在は基本的には夜に活動する者がほとんどであり、白空もまた例外ではない為に殆ど使った事がないのが実情だが。

「絶好の花見日和だな・・・」

しかし、ここにいるのは自分達の常識など軽く飛び越えていく存在だと承知して守って貰っている人間達と、人の考える常識などとはある一定まで以上はよく分からないし理解する必要も無い妖怪なので、まあ、はたから見れば異常な和洋折衷もたいした問題ではない。

しばし障子の向こうに見える日の光を澄んだ銀の瞳で見ていた白空だが、一瞬何かを決定するかのように瞳を細めた後、すう、と重力を感じさせない足取りで開け放たれた障子から縁側へと近づいた。そのまま外へと出て、ゆっくりと歩みながら顔を上げた彼の目に飛び込んできたモノは、世にも美しい光景だった。

鮮やかな蒼穹の蒼さが、ピンク色に染まった木々から射す木漏れ日となり、大地に降り注ぎ、柔らかな暖かさを含んだ風が吹くたびに大地に注がれた光が刻一刻とその場所を変えていく――。

「――変わらない物などありはしない・・・か」

ふと、白空が悲しそうに呟く・・・。

彼は永い時の中で多くの別れを繰り返し、今ここにいます。

巡る季節の名は変わらねど、流れ行く時で同じ日など一つも無いと。

繰り返される日々の中で、しかしそのどれもが二度と繰り返される事の無いものだ。

けれど、だからこそ分かる事もやはりあった。

それは、時が流れていくからこそ、新たな出会いがあるのだと言う事。

新たな出会いがあるからこそ、彼は〃彼のままで〃在ることが出来ると言う事。

「・・・美しい」

そつと吐息の様に紡ぎ出された言葉には、感嘆の響きが、整った顔には世にも美しい、とても〃妖怪〃とは思えないほど柔らかく、鮮やかな〃人間〃の微笑み。

と、その時だった。

「マジ・・・？」

まだ若い、少年の声が静かな空間の中に響いた。

突然聞こえてきた声に、白空は微笑みを消し、先程のゆっくりとした歩調とは比べ物にならない程のすばやさで振り返った。

正直、いる事には気付いていたが、すぐに立ち去るだろうと考えていたので予想外の行動に反射的に動きが速くなってしまった。

（随分と度胸のある者達だな・・・）

そう思いながら視線を移すと。

そこにいたのは、真新しい制服に身を包んだおそらく先程言葉を発したであろう男子生徒——名前を、龍りゅうと言う——と、同じく新品の制服に身を包んだ女子生徒——明理あかり——だった・・・。

二人とも、怯えた表情を隠す事も出来ずに立ったまま固まっている。

(今年新しく入ってきた者達か・・・)

心の中でそう思いながら、白空は固まっている二人に澄んだ銀の瞳を向け、静かに言葉を発する。

「何用だ？」

「「！」」

途端にびくりと肩を揺らした二人を見て、極力優しい響きにしようとな努力はしたものの、人間とは違う響きのするこの声では無意味だったか、と白空は思い、口を閉じた。

「・・・・」

「「・・・・」」

お互いに一言も発さなくなった無言の時間を粉碎したのは、龍だった。

「あんたが・・・この学園を守っている妖怪、なのか？」

詰まりそうになる声を必死で紡ぎながら並べられたその言葉は確認だった。

正直に言えば、もっと他の事も聞きたかったのだろうが、現状では精神的に一つの事を聞くのがやっとだ。

白空はその事を確認すると、先程と同じく、静かに答える。

「・・・そうだが？」

またもや不思議な響きがする声で紡がれた答えに、疑問が含まれていたことに彼らは気付いただろうか？

つまり白空は、何故そんな事を聞くのか？と不思議に思ったのだ。〃ここ〃を守っているのは自分だけだから。本来それは、ここに来る人間の誰もが知っているはずの事柄で、明らかに〃人〃とは異なる気を纏った自分が見間違えられる事は無いし、他の妖がいる

はずも無い。

と、白空が不思議そうに龍と明理を見つめていた、その時——
「大丈夫!？」

数人の先生が立ったまま固まっている二人に声をかけた。

先程まで行われていた《入学式》が終わったのだ。二人も校舎に入るついでにここに立ち寄ったのだろう。

「先・・・生・・・」

もう我慢できない、と言うようにふらりと倒れこむ少女、明理を若い女の先生——華^{かな}奈が支える。すると、近くにいた男の先生が半ば呆れたように言葉を発する。

「まったく・・・二人きりでよくここまで来る事が出来たものだ。」

その言葉には、白空も、

(確かに。)

と、思った。

彼がいる部屋は校舎の奥の方の廊下にある襖の戸を開かないと入る事が出来ないし、今彼がいる開けた場所は殆ど森への入り口だ。ここまで見つけにくい場所は校舎の裏にある小さな花壇ぐらいだろう。

などと考えていると、

「すみませんね、白空さん。ご迷惑ではありませんでしたか？」

と、にっこりと優しく微笑む老人が前に出てきて白空に聞く。彼はこの学園の園長だ。

「問題ない。」

静かに答える白空に園長は「好かった。」と微笑む。

すると、先程の会話を聞いてからだろう、少年、龍が言葉を発する。

「はくあ・・・?」

龍から発せられた言葉は疑問だ。

自分の名を知らなかったのか、と白空は思い、言葉を紡ぐ。

「私の名だ。」

静かに紡ぎ出された言葉に、龍はああ！と納得顔になる。

「——ところで、最初から疑問に思っていた事が白空にはあった。そなた達は、どうやってここに来る事が出来たのだ？」

「へ？」

突然の質問に龍と明理の声が重なる。

「えっと・・・」

答えたのは明理だ。

「あたしと龍は近くの神社で生まれたから、幼い頃からそう言う気配とかには結構敏感で、あなたの〃気〃を探してみたら・・・意外とあっさり・・・」

最後の語尾が少し小さくなったのは、嘲るような響きが少なからず混じってしまったからだだろう。もちろん、その程度で怒るほど白空は気が短いわけではない。

「そうか。」

短い返事は納得の証。

ゆっくりと彼らに背を向けると、自らの部屋へと進む。

部屋の手前で発した不思議な響きのする言葉は、龍と明理の潜在能力を間違いなく正確に感じ取った白空だからこそ紡げるものだった。

「〃強く〃なるだろう・・・」

2 美しき人妖『白空』

今日の天気——快晴。

こんな時は、決まって〃彼〃が外に出てくると相場が決まっている。

大妖怪と呼ばれるこの学園の守護者《白空》が。

事実、もう既に校庭に出てきている……。

彼は天候によって体調が左右されると言う性質を持っているので、今日のような空一面雲一つ無い蒼穹が広がっているような日は、特に体調だけでは無く、気分も優れる。

「……」

無言で空を眺めているだけでも、彼にはやはり、人とは違うどこか神秘的な美しさが表れていた。

風に揺れる白銀の髪、太陽の光と共に輝く白銀の瞳。

シミ一つ無い純白の着物が神聖さを際だたせ、羽織っている美しい模様の描かれた蒼い羽織が見事に空の蒼さに溶け込んでいる——。

この姿を見て、あまりの美しさに戦く者が一体どれほど多く、醜いなどといえる者がどれほど少ないのだろうか？

《この世の者とは思えぬ美しさ》とは、まさにこのことだ。

とは言うものの、

「……」

やはり無言のまま空を見上げている白空自信は、全くと言っていい程、その様な事は気にしていないのが現状なのだが……。

しばしそうやって空を見上げていた白空だが、

「「白空さん！」」

と、彼の名を呼ぶ二つの声に視線を空から離れた。
「？」

ゆっくりと、流れるような動きで振り返った白空の目に飛び込んできた者は、一週間前ほどに新入生としてこの『対魔学園』に入ってきた「天才児」龍と明理である。

「龍と明理、か・・・」

ぽつりと呟く白空の声にも、喜びが混じっている。

白空がこの二人に会ったのは、入学式の当日だった。その様な短い期間にも関わらず、この二人が気軽に声をかけてくるのは、彼が二人の持つ潜在能力の事を、確信を持って「強い」と言ったからだ。

入学したてで、不安もあっただろう二人にとってその言葉は、大きな「自信」と輝かしい「希望」・・・そして殆ど意図せずに、自然と白空に対する「安心感」を与えたのだ。

「また散歩？」

隣に來た龍が問いかける。

白空は分かるか分からないかの微笑みを浮かべながら静かに答える。

「ああ。空がこうも美しいと、無性に外へ出たくなる。」

空を見上げて小さく微笑む白空を見て、今度は明理が口を開く。

「確かに！特に今日はとっても綺麗な蒼穹の空だから、なんとなく白空さんの気持ちも分かる気がする！」

にっこりと笑う明理に視線を移した白空の鮮やかな銀色の瞳が、温かな光を帯びた。

と、その時――

キンコンカンコン・・・授業開始の五分前を知らせる鐘が、校庭中に鳴り響く。

「あ・・・もう授業かよ。」

不満の顔で呟く龍を引っ張りながら明理は笑う。

「また後でね、白空さん！」

「ああ。」

短く返す白空の言葉をしっかりと聞き、龍と明理は校舎へ走っていく……。

「……」

再び一人きりになった白空は、また暫く空を見上げた後、自らの部屋へ向かうべく校舎の奥へと歩を進める……。

晴れた日に彼がする事は実に様々である。

基本は今日の様に外に出てきて散歩をするのだが、比較的に気ままな性格の彼は、いつも行動が同じとは限らない。

今回もどうやら〃そう言う〃パターンの様で。

自らの部屋の開け放たれた障子をちらりと見ながら、そちらへは行かずに更に校舎の裏へと入っていく……これは龍と明理も知っているパターンだ。

彼が校舎の更に奥へと進むのは、そこにある小さな花壇の花々を見る為なのだ。

花壇に付くと、実に色取り取りの美しい花々が咲き乱れ、まるでその一角だけは世界から切り離された楽園の様な雰囲気を感じ出していた。

だが、いつもならば観賞して終わるだけの白空が今日はそうではなかった……

「そなた達の力を、少しだけ使わせて貰うぞ。」

不思議な響きで発せられた言葉とほぼ同時に、小さな美しい花に白空の透き通って見える程白い左手がそっと伸びて花の花弁に触れる——すると、花はパツと一瞬にして花びらの色の粉末となり、

白空の手の中に吸い込まれる様にして治まる……。

これは、白空の〃妖力〃のほんの一部だ。

花や木の生命力を、それ自体を分解して粉常にする事で得る白空
独自在生み出した自らの娯楽と他の生命に目には見えない栄養を与
える為の力。

「そなたの命、無駄にはせぬ。」

優しく微笑みそっと左手の粉末に呟いた白空は、くると身を翻
して今度こそ自らの部屋の前で止まる。

縁側に腰掛けた途端に流れる様な動作で何もない空間から煙管を
取り出した白空は、雁首に左手の粉末を乗せる……と、そこに
一瞬にして蒼い炎が灯り、次の瞬間には消えたと思うと煙が出始め
る。

「……ふう。」

まるで温かい湯船にでも入っているかの様に目を柔らかく細めて
吸う白空の周りを包み込む煙は、甘く優しい〃花の薫り〃がする。

「……たまには好いものだな。」

そっと吐息の様に紡ぎ出された彼の口元には、はっきりと優しい
微笑みが浮かんでいる。

（今日は一段と好い日だ。）

心の中でそう呟き吸い口から花の〃生命力〃を吸う今の白空は《
妖怪》だと言う事を感じさせる程の凄艶な気配を纏っているにもか
かわらず、やはりその美しき顔に浮かぶのは、優しき〃人間〃の微
笑みだ……。

本来妖怪は、人と交わる事はなく、自由気ままに様々な自らの意
志を持って行動する者達だ。

故に時に人を傷つけもする、脅かしたりもする。だが、助け合う
事に関しては、一切無かった。

そして、それを成したのが白空。

恐ろしくも美しい容姿と、桁外れの妖力を持った〃優しき〃太古

の大妖怪。

妖怪も〃心〃を持つ。

悲しい時には泣き、楽しい時には笑う。

もちろんの事だが、個性もあるので、非道な事をする者達や、反対に白空の様に助けるといふ行為をする者もいたのだ。

だが、そんなふうに分達もさまざまな思いを感じている事を、今の世を生きる人間達は殆ど知らない、白空は感じていた。

更にはそれに加え、今の人間達では、人や動物などが死んだ後、何らかの思いを抱いて化けてでる霊鬼^{れいぎ}だけではなく、自分たちの様に森羅万象の思いや願いによって生まれる妖怪ですらも、一括りにされ、人間を傷つける邪悪な存在^{アヤカシ}〃妖〃と呼ばれる様になってしまった事を、少なからず悲しく思っていた。

双方の事を言う時は構わない。

けれど、〃妖〃と言うその呼び方を自分達妖怪だけに向けられるのは、非常に不本意なのだ。

自分たち妖怪と霊鬼は違う。

妖怪は人と同じように優しさや怒りと言う感情をある程度我慢する事が出来る強き心を持っているが故に、自分の思う様に生きる事を望む。

だが、霊鬼と言われる幽霊達には強い感情を制御するだけの心を持っていないし、自分達が好きな事をする為に必ず周りを巻き込む。妖怪にもその様な愚かな真似をする者達がいるが、正直一緒にされるのは迷惑極まりない。

だからそこ、人間が生み出した言葉に悲しみが浮かんでくる反面、人間達にその様に思いこませる事をした他の妖怪・霊鬼に怒りを抱いている事も、また事実。

正直なところ『ふざけるな。お前達はどうか呼ばれようが思われようが私にはどうでも好いが、こちらを巻き込む様な事をするな。目

障りだ。』と、言ってやりたいとさえ思っていた。

そうすれば、大概の妖怪・霊鬼は、自分の妖力に戦き、基本はしなくなるだろう。

だが、だからといってこの学園の守護を後回しにして世界中にいる妖怪・霊鬼に片端から掴みかかって言う事を聴かせるわけには流石にいかない。

「はぁ・・・」

あまり意識せずに出てしまった苦悶の溜息を静かにしまい込み、上を見上げる――。

「美しい・・・」

思わず眩いた白空の瞳に映るのは、悩みなど気にするな、と微笑む紺碧の空だった。

3 夜の宴

時は過ぎ、空が漆黒の闇を纏う夜――。さわ・さわ・さわ、と校庭の大地に吹く風が奇妙な流れを描いていた。

時刻は十二時半。

昔は妖怪達や霊鬼達が動き出すと言われていたこの時間に、珍しく校舎内がざわざわと騒がしいのは、今日が一週間遅れの入学祝いだからだ。

基本的に小さな事ではない限り、この学園は事あるごとに祝う風習を持っている。更に、それが入学祝いともなれば、殆ど祭りに近い程の大騒ぎとなる。

特に〃妖怪〃達だ。

基本的に彼らは夜行性の者が多い為、余計に盛り上がっている・・・。

そして、これこそがこの学園が他とは違う理由の二つ目だ。

この学園は古くから妖怪と人間の両方がお互いの事を知るために学んできた。

それ故に人間側の校舎の隣には、妖怪側の校舎があるのだ。

人間は妖怪や霊鬼の事を学び、出来る限り〃妖^{アヤ}〃と呼ぶ習慣を消し、妖怪は人間がどのような感情や思いを持つのかを学ぶ・・・。

正直、〃対魔^{たいま}〃の学園と言うよりは双方の事を知る為に創られた様なものだ。

人間側も、自分を守る必要最低限の対魔法しか教わる事はない。もちろんの事、人間側には白空がいるのでこの学園の者に手を出そうなどと言う妖怪は出るはずも無く、おかげでこの対魔学園は創立

二百年の歴史と伝統を今も受け継いでいる。

それにしても、今夜の妖怪達のはしゃぎ様には正直驚かされる。

「ほらほら、もっと飲みなさいな。」

と言つて酒を人間達に注いでいる濡れ女や、

「おらあ！もうオレは踊るぜえ！！」

と叫んで踊り出す天狗など、実にさまざまな妖怪達が人間側の体育館で騒いでいる。

正直、夜寝なければならない人間達の事などお構い無しだ。

まあ、幸い今日は人間達も起きて騒いでいるのだが……。

（これでは祝つていと言うよりはただ楽しんでいるだけだな……
・）

と心の中で思っている白空も、妖怪側の宴席で酒を飲んでい

と、そこに、

「白空さんまで飲んでいるのか？」

と、龍が来て聴いてくる。 対する白空は、ふっと柔らかに微笑みながら答えた。

「まあな。これ程までに〃楽しい〃祝いの席は年に数回だけだからな。」

「は……はあ……」

もうずいぶん飲んでい

るのにも関わらず、平気な顔で答える白空にさすがの龍も少したじろぐ。

第一、白空がこのような場所に出てくる事自体が異例なのだ。

入学式も含め、彼はあまり人混みに出てこない。 別に人混みが嫌いな訳ではないのだが、いつも基本は一人で過ごしている為、慣れていないのだ。

「……美味しい。」

だからこそ、騒がしいこの空間の中にひっそりとはいえども混じり、酒を飲む彼に、酒に酔っていない者達の誰もが驚きの目を向けている……。

しかし、実のところ〃人間達〃が白空に対して向けている驚きは、この場にいる事や酒を飲んでいる事ではなかった――。

本当に人々が驚き、中には恐怖すら感じる者がいるその原因は、彼の表情だった……。

――妖怪の微笑み。

誰もが胸中に隠している彼の微笑みの名は、まさにそれだった。常に優しく温かい〃人間〃の微笑みを浮かべていた白空が今浮かべているのは、美しくも冷酷なもの……。

たえ彼の本来の姿が〃妖怪〃だと分かっている、戦かざるを得ない。

だが、人間達は納得しなければならないのだ。

彼は――美しい青年の姿をした《白空》と言う名のその者は、時に人を傷つけ苦しめ陥れる、残忍かつ冷淡な紛れもない《妖怪》と呼ばれる存在に属する者なのだから……。

しかし、だからといって白空が自分達〃人間〃を傷つける様な残酷で恐ろしい妖怪ではない事も、人々は知っている。

たとえば彼が妖怪であっても、《優しい心》を持っている事には変わりないのだ。少なくとも、今の様に酒を飲んでいるだけでは危険な事をしてくるなど考える事も出来ない……。

だからこそ、と人は思う。

だからこそ白空はここにいて、自分達を守る事が出来るのだと。個人個人が思考を巡らしていたその時――。

コトン。

極僅かな音を立てて、白空が持っていた杯を机の上に置き、同時に、

「寝る。」

と言だけ言葉を発して机に突っ伏し、瞳を瞑る。と、一瞬静かになる体育館……。

彼が行動の前に言葉を発するのには、必ず何らかの意味がある。それが重要であってもなくても、だ。

「先程『寝る。』と仰いましたよね？」

みんなに問いかける様に呟いた濡れ女の言葉をきっかけに、小さな声ながらも口々に話し出す双方。

「白空さんが言葉にしたって事は、何らかの意味があるって事だよな？」

と龍が問うと、先程まで踊っていた天狗が、

「ああ、そうだとも！」

と、小声ながらも力強く答える。

「て、事はつまり……『静かにしろ』って事かな？」

と今度は明理が問いかけると、それに肯く妖怪達。

ちなみに事の張本人たる白空はと言うと――。

（面白くなってきたな……）

と、実は寝るふりをして他の者達の会話に聞き耳を立てていたりする……。

実のところ、これが彼の言った《楽しい》という要素だったりもする。

「いや……でも入学式のお祝いだし、別に騒がしくても良くないか？」

と龍が意見を言うのと、即座に濡れ女が異議を唱える。

「いけませんわ！あの方の眠りを妨げるなど、言語道断です！！」

他の妖怪達も必死で濡れ女の意見に同意している。一方白空は、（別にかまわないのだが……）

と、特に気にしているわけではない。

だが、当然の事ながら、白空が起きている事など知るよしもない妖怪達と人間達の話は続いていく。

「白空さんは別に好いと思うのだけど・・・」

と明理が妖怪達の意見に小首をかしげるが、妖怪達は頑として意見を曲げない。

「いいえ、きつと気になさいますわ。」

と濡れ女が言うのと、

「うむ。ワシも濡れ女の意見が正しいと思うぞ！」

と天狗が賛成し、他の妖怪達も次々に賛成していく。

「あー・・・」

この事態には、いつも強気の明理ですらも呆然と眺める事しかできない。

「で、でもさ、白空さんはあんたらがそこまで言わなければならぬ程にその・・・妖怪に対しては怖い方なのか？」

最後の言葉に少なからず恐怖の感情が籠もった龍の問いかけに、妖怪達が口々に言葉を発する。

「ええ、ワタクシはまだ経験した事はありませんが、噂によると・・・かなり・・・」

と、口ごもる濡れ女に、

「ワタシの仲間が力を見た事があると・・・」

と、蛇女が言葉を発する。途端に少しざわつき始める妖怪達。

「嘘だろ!？」「マジかよ。」「絶対恐ろしかっただろうな・・・」

そう口々に呟く妖怪達の言葉には、どれも必ず畏怖が読み取れた。

「なんでも、桁外れの妖力でただその力を当てられただけで気絶してしまったとか・・・」

更に恐ろしい結果を話す蛇女の言葉に、さしもの人間達も震え上がる。

「ま・・・マジ?それって本当の事なのか?」

「もちろん、本当の事ですわ。」

と切羽詰まった声で問いかける龍に、蛇女は真剣に答えを紡ぐ。

「「うそ・・・」」

呆然と呟いた龍と明理の声が重なった。

「で、でも！白空さんはそんなに恐い方じゃないよ！？」

今度は明理が言葉を発すると、すかさず天狗が、

「人間にとつたら〃とっても優しい妖怪〃って事になるのだろうか、ワシ達は違う。」

と顔をしかめて言葉を発する。

(・・・)

次々と会話が進んで行く中、白空は一つの事を考えていた・・・。

「でもさあ、やっぱり俺は白空さんがそこまで恐ろしいとは思えない。」

と、どうにも納得できない顔で呟く龍に、明理が提案する。

「じゃあ、白空さんを起こして直接聞いてみようよ！」

明理もやはり妖怪達の意見に納得できなかったのだ。だが、そ

の提案を聴いた妖怪達の顔が、一瞬にして蒼白になる。

「とんでもございません！ワタクシはまだ命が惜しゅうございます
！」

と、他のみんなを代表して濡れ女が言葉を発したその時だった――。

一瞬にして強大な妖力が広がり、重く、烏肌の立つ様な異様な威圧感が充満した空間となった体育館の中で、不思議な響きのする白空の声が双方に届いたのは・・・。

「ほう・・・私はそこまで非道か？」

凍り付く妖怪達。驚きの表情をする人間達。

彼らが見たモノは、吸い込まれそうな程澄んだ鮮やかな蒼い空色の瞳を表し、恐ろしさを通り越して美しいと思えるほど神々しく〃神聖な妖気〃を纏って立つ〃天魔の大妖怪〃と呼ばれし者――。

美しく、鮮やかな、それでいて決して失う事のない強さを秘めた太古の存在だった……。

妖怪達や先生達、今年入ってきた新入生以外は誰でも見た事がある鮮麗かつ冷艶な姿。

初めて見る龍や明理ですらも、息をのむ程の美しさと恐ろしさが入り交じるその姿をより引き立たせている美しい蒼の瞳が、静かに妖怪達へと向けられる……。

「！」

途端に固まる妖怪達。正直逃げたい気持ちでいっぱいだが、この状況では追いかけられるのが目に見えている為、足を動かす事もままならない。

そして白空から紡がれる言葉——。

「答えよ。私は何もされていない汝らが怯えなければならない程恐ろしく、非道な存在か？」

「！！！」

ただでさえ不思議な響きのする声が今は澄み切り鋭利なものとなっている……それに加えて白空は『答えろ』と命じた。

今の彼は〃神聖な妖力〃たる《本来の力》を解放している——蒼き瞳が現れる時は、彼が力を解放した時だと決まっているのだ。解放した彼の妖力は噂通り……否、噂以上に強いのだと、その場にいた誰もが確信した。

それほどまでに、今の白空が放っている妖気は凄まじいものだった……。

たかが想像などでは表せれない程の力を持っているのだと言う事を、この場にいた全ての者達が納得する程に。

「……」

じっと押し黙って見ている人間達と、どうする？と話し合っている妖怪達……それに更なる追い打ちがかかる。

「答えよ。」

白空が言葉を発したのだ。
途端に静まりかえる体育館。

(どうするのかな?) (さあ?)

明理と龍が目を合わせて疑問を投げかけあったその時——しんと静まりかえった体育館に、妖怪達の声が木霊した。

「スミマセンでした!!」

「?」 「!?!?」

混乱する白空と人間達をよそに、妖怪達は我先にと体育館から出て行く……。

まあ、要するにあまりの恐ろしさに頭が回転せず、とりあえず誤って逃げたのだ。

しかし、白空は追いかけるどころかそのままそこから一步も動かず、

「……聴きたかったただけなのだが……」

と、言葉を発する。

——つまり、彼は元々妖怪達を追いつめて叩きのめしてやろう、と思う程怒っていたわけでもなければ、追いつめるつもりもなかったのだ。

最初から、ただ『自分はそれ程までに妖怪達を非道に追いつめたのか?』と、聴きたかっただけ……。

どうやら彼は、自分が思っているよりも行動に聴きたい事・やりたい事が籠もらず、逆に別のものが入る様だ。

(白空さんって……) (ああ、そうみたいだな。)

このことに気づいた明理と龍は小さく微笑む。

やはりまだまだ自分達は、優しくも強い、あの美しい妖怪の事を知らないのだと、反省をしながら。

結局のところ白空も、

(聴きたい事は解らなかったが、まあ、自分の事を知る事が出来たのは好い事か……)

と、割り切った。

こうして、一週間遅れの祝いの夜は過ぎていく・・・

4 小さな妖怪

入学式から二ヶ月が経ったある日。

梅雨によって嵐と言うに相応しい程の大雨が降る最悪な天気、朝から自室の机の上に突っ伏したままだった白空がゆっくりと起きあがる――と、途端に白銀に染まっていく髪と瞳。

完全に起きあがった白空の口から、小さな言葉が零れた。

「狐・・・？」

今、気付いた。

雨のせいで匂いも気配もいつもの様に完璧という程の掌握が出来なかった。

だが、いる事に気付かなかったのは雨のせいだけではない様だ。

（子供か？）

感じる妖力がとても弱いのだ。

思いの強さが強い程妖力が強くなる霊鬼とは違い、妖怪は生まれ落ちたその瞬間から今までの〃生きてきた年月〃で強さが決まる。

勿論例外はいくらもあるが。

それでも、妖力が弱いという事は、つまりは年月をあまり重ねていなと言う事になるのだ。

匂いや気配に関してはこの雨の為に詳しくは分からないが、妖力に関しては、たとえ押し留めていても、だいたいの強さや妖怪か霊鬼かと言う事は白空には分かる。

そう思いを巡らせていたその時。

ザワザワザワ・・・と、急に辺りが騒がしくなった。

「気付いたか・・・」

そう言った呟きには真剣な響きがある。

おそらく、他の妖怪達も来訪者に気付いたのだろう。騒がしいのはその為だ。

「まずいな。」

静かに呟いた瞬間、素早く立ち上がりそのまま襖を開いて滅多に通らない廊下へと出る白空。

(手を出さなければ良いが・・・)

少しずつ速くなる歩調を落ち着かす事も出来ず、玄関へと向かう白空の胸に舞い降りたのは、小さな不安だった・・・。

(これは・・・?)

突然現れた感情に、止まりそうになる足を半ば無理矢理動かす。

正直、不安という感情が出てきたのはもう随分久しぶりだった。

それ故に少し戸惑ってしまったのだ。だが、ここで立ち止まる事は出来ない。

たとえどれほど体調が優れなくとも。

(あれ程弱い者ならばここににいる者達でも殺す事が出来るだろう・・・)

そう、妖怪は種類にもよるが、殆どが人間、または弱い妖怪・霊鬼を食餌としている・・・。

つまり、来訪者はここににいる妖怪達にとって、滅多に食べる事が出来ない大好物なのだ。

ザァ――。

外に出て、真っ先に目に飛び込んできたのは大粒の雨だった。

「っ・・・」

雨もここまで酷いと、さすがの白空も顔をしかめざるを得ない。

天候によって左右される彼の今の体調は最悪すぎる。頭が酷く

痛み、空が落とす悲しみの涙に胸が締め付けられる・・・。

その場に座り込んでしまいたいと言う思いを振り払い、再度外へと視線を移す――。

「なんと旨そうな匂いなのかしら・・・」

見えた光景は、校庭の端にある森の前でうつとりとした顔をしながら呟く濡れ女と、その周りに集まる妖怪側の校舎にいる妖怪達だ

った。

(まずい！)

殆ど反射的に白空が外へ足を踏み出そうとしたその時、騒ぎに氣付いた人間達が玄関にやってきた。

「何が起こっているの？・・・って、白空さん！？」

途端に第一声を発した若い女の先生、華奈が白空に氣付き驚きの声を上げる。

「白空様？」

そしてそれは、どうやら妖怪達の耳にも届いた様だ。

今にも喰ってやろうかと言っていた濡れ女とその周りにいる者達が恐る恐る玄関へと目を向ける・・・。

「喰うな。」

瞬間、これ以上の好いタイミングは無いだろうと思い、白空は妖怪達に言葉を発する。

「！？」

予想外の言葉にざわつく妖怪達・・・だが、直ぐにハッと何かに氣が付いた様に互いに視線を巡らせた後、濡れ女が顔を引きつらせながら声を発する。

「も、申し訳ございません！白空様が狙っていたとはつゆ知らず、誠に失礼致しました！！！」

濡れ女の言葉と共に、また、我先にと校舎へ走っていく妖怪達・・・。

(私はそれ程までに恐ろしい事をあの者達にしたらどうか？)

と、本気で心配になる白空の心も知らず、あっという間に走り去る妖怪達は校舎へと消え失せた。

「・・・っ」

危険が無くなった事で緊張が消え、頭の痛みが蘇ってくる。途端、ガクッと膝を突く白空。

「「白空さん！？」」

いつの間に来たのか、龍と明理が白空の元に駆け寄ってくる。

それに、

「妖怪達がいた場所に、子供の人妖がいる筈だ……連れてきてやってくれ。」

と静かに紡ぐ白空の言葉を聞き、先生達が一斉に森へと走っていく。

すぐに戻ってきた先生達の中からそっと歩み出た華奈が抱いていたのは、見た目はまだ六・七ぐらいの長い金色の髪をした少女だった。

雨に打たれていたせいかわ、心なしか顔が青ざめている様に見える。白空は静かに立ち上がり、華奈から子供を受け取った。

「……あまり好い状態ではないな。」

静かに呟いた白空の顔には、憂いが浮かんでいる。と、その姿を見た明理が、白空に声をかけた。

「その子……どうするの？」

心配そうに小首をかしげながら問う明理に、白空は安心させたい一心で柔らかな微笑み言葉を紡ぐ。

「私が預かる。」

しかし、まだ心配そうな明理の顔を見て、先程の妖怪たちの会話を思い出した。

（確か、私が狙っていたとか何とか……）

暫く考えた後、明理がいったい何の心配をしているのかを理解する。

「ああ、安心しろ。私は同族を喰らう事はない。」

優しく紡がれた白空の言葉に、やっと明理の表情が柔らかくなったのを見て、白空は内心ほっと胸を撫で下ろす……。

要するに、明理は白空がその小さな人妖を食べないかが気がになっていたのだ。

問題が解決した事を確認し、白空は小さな人妖を抱えたままゆっくりと自室へと歩を進める……。心なしかその足取りが重い

のは、当然の事だった。

（まだ本当に幼いというのに・・・）

そう少女を見ながら胸中で呟く。

この小さな少女に一体何があったのか、実の所白空は大体の事は想像が付いていた。

おそらく、親が他の妖怪・霊鬼、または強い霊力を持った人間の対魔師^{たいまし}によって殺されたのだ。

いくら妖怪とは言えど、育ててくれる存在がいなければ生きていく事は出来ない。

ましてや、こんな年端もいかない様な少女が生き抜く事など出来るはずがない。

大抵は、先程の様に強い妖怪や霊鬼に喰われるか殺されるかして終わりだ・・・。

それを考えると、この少女はまだ幸運だと言えるだろう。

これからは、どんな妖怪よりも強く気高く、//優しい//存在に守って貰えるのだから。

5 黄金色の妖狐『風羽』（前書き）

いきなりぽつんと更新してみる。

5 黄金色の妖狐『風羽』

明くる朝——布団に寝かされていた小さな少女は、着せられていた布を取って周りを見渡した。

そして、そこで目に入った強大な存在に気付き、体を強ばらせた。
・・・。

正直に言って、無理もない。

今、彼女の目の前で机に突っ伏し寝ている彼が思っていた通り、彼女は親が強い妖怪に殺され、必死で逃げてきたのだ。

温かな布団に寝かされていたとは言えども、彼が敵ではないと言う確信が持てる要素など何処にもない。

と、その時——寝ていた白空が静かに体を起こし始める。

「ひっ!？」

途端、少女の口から悲鳴と同意義の鋭い怯えの声が発された。

「・・・。」

完全に起きあがり、いつもの白銀の髪と瞳の姿に戻った白空は、静かにその澄んだ瞳を少女に向ける・・・が、次の瞬間には怯え震えている少女に優しく微笑み、言葉を発する。

「案ずるな。私はそなたの敵ではない。」

しかし、彼の優しい微笑みと静かだが柔らかい響きの声を持ってしても、少女の震えは止まらない。

（何故こんな年端もいかない子供がここまで怯えなければならないのだ・・・）

胸に湧き上がってくる少女の運命に対する悲しみと、このような事をした者達への怒りを押しとどめながら、白空はゆっくりと立ち上がり少女に近づいていく。

「!?!」

途端に声にならない叫び声を上げる少女・・・。

必死で逃げ道を探すが、廊下へと続く襖はいつもの様に閉まっているし、今日は外へと続く障子もぴしゃりと閉ざされている……。残るは一番近い少女自身の後ろにある普段白空が使っていない方の部屋へと続く襖だけ。

素早く状況を確認した少女はサツと立てり、襖を開け放ち部屋に入る――が、疲れが残っていたせいかな足がもつれてしまい畳に手をつく。

と、少女に覆い被さってくる影……

「っ！」

やられる！――少女がそう思い、もう逃げられないと瞳を瞑ったその時、そっと伸ばされた手が少女を抱き起こした。

「怪我はないか？」

「……え？」

ゆっくりとその場に降ろされながらかけられた言葉に、一瞬耳を疑った。

少女は思う、どうしてこの人は自分に優しくしてくれるのだろうか？と。

その思いは眩きとなって零れた――。

「どお……して？」

「？」

少女から初めて発された言葉の意味が理解できず、白空は少しばかり眉根を寄せる……

（「どうして？」とは一体……）

暫し沈黙する双方。

だが、暫くして白空が先に少女の質問の意味に気付き、声を発する。戻ってきた優しき微笑みと共に。

「言っただろう？ 私はそなたの敵ではないと。」

それに……傷つき弱っている者を救う事は当然の事だ。」

「あ……」

不思議と心に響く言葉――それは、奔流の様に幼い少女の心を

癒して行き……。

「っ……う……」

静かに零れ始める心の雨。 少女の涙。

「……」

言葉は無用。

白空はそっと少女を抱きしめる……。途端、少女の中で押しとどめていたモノが一気に溢れた。

「うああああ！」

怒り、悲しみ、悔しさ、孤独感……。少女が持つそれら全ての
// 思い//を白空は受け止める。

それは今、自分にしかできない事だと分かっているから。

少女はひとしきり泣いた後、ゆっくりと白空の腕から身を引いた。

「大丈夫か？」

静かに白空が問うと、少女は瞳に溜まった涙をふき、顔を上げる
——初めてきちんと見る事が出来た白空を映した少女の瞳は藍色
だった。

「風を使いし者か……」

ぽつりと呟いた白空の言葉に、少女はコクンと小さく肯く。

妖狐、と一概に言っても、扱う力によって呼び名が変わったり全く別の種族の者として扱われるので、結局のところひとくくりに出来る妖怪の種族名は少ない。

彼女の一族は風を使うので人には主に《風切り狐^{かぜき}》と呼ばれる事が多いのだが、あまり人々に危害を加えない事から妖狐としての印象が弱く、//お稲荷様//として祭られた者もいるくらいだ。

だが、そうやって人間に慕われているのをよく思わない者達が多い。

それに加えて彼女の一族は飛び抜けて力の強い妖怪ではないから尚更だ。

（弱い者いじめとは氣にくわんな……）

今まで彼女が受けてきた苦しみを思い描き、再び湧き上がってきた怒りを押しとどめていた白空の耳に、小さな声が届いた……。「先程は失礼致しました。お助けいただき感謝します。」

「……ああ、無事で何より。」

とても六・七の幼い少女はしないであろう言葉遣いに少し驚きながらも白空は小さく微笑む……が、ある事に気付き少女に問う。「そなた、名はあるか？」

「え？」

突然の質問に一瞬きよんとする少女。だが、すぐに真剣な顔に戻り答える。

「いいえ、まだ付いていません。」

「そうか……」

ある程度は予想していた答えに、暫し考え黙り込む白空。

基本、妖怪は名前を持ってはいない。

結局は自分のしたい様に生きる者達が殆どなので他の者達との付き合いが少なく、付ける必要が無いのだ。

もちろん異例もあり、彼女の一族から出た〃お稲荷様〃にはそれぞれ人が付けた名前が付いているだろうし、事実、人と深い関わり合いを持つ妖怪達には名が付けられている事もある。白空自身がその代表的な例だ。

だが、いくら〃お稲荷様〃が出る様な温厚な妖狐一族でも、さすがに子供に付けられている事は無い。

しかし、ここは人が暮らす学園だ。

人にはそれぞれ〃名〃があり、呼び合う事で互いを認識している。今の少女には追われ、傷つき、帰る場所はない。ならば、当然白空や人間達と共に人間側の校舎で暮らすのが一番安全だろう。

しかし、その為には〃名〃が必要だ。白空も人間も相手と呼ぶ時は名前を使う事を当然の理ことわりとしているのだから。

暫く考えた後、白空は思いついた名を静かに呟いた。

「かざばね・・・」

「？」

突然発された言葉に首をかしげる少女。それを見て白空は言葉を紡ぐ。

「私は、そなたにとってここにいる事が一番安全だと思う。それは分かるな？」

「・・・はい。」

静かに教え諭す様に話す白空の言葉に少女は素直に答える。

「ならば名が必要だ。私達は常に名を呼び合って日々を送っている。」

「はい。」

これにもだいたいの事は察したのだろう。少女はしっかりと肯きながら答える。

（元々物分かりの良い性格の様だな・・・）

少女の事を少しではあるが理解しつつ、本題に意識と話を戻す。

「そこでだ、つい先程思いついたそなたの名が〃風羽^{かざばね}〃だ。」

「なるほど・・・先程のは私の名前だったのですね？」

「ああ。」

白空の迷いのない返答を聞き、少女は暫し何事か考えた後、外していた視線を戻し、はっきりと言葉を紡いだ。

「その名、ありがとうございます。」

「・・・良いのか？」

少女の言葉に、本当に気に入ったのかを確認をする白空。

「もちろんです。命を助けていただいた方から貰った名・・・きっと私にぴったりなのだと思います。」

真剣に言葉を紡ぐ少女に白空は意図せずに柔らかい微笑みを浮かべた。

「そうか。」

久々に発した彼特有の納得の意を表した短い返事は、何故か不思議と澄んで聞こえる・・・が、次の瞬間にはくると反転してい

つも自分がいる部屋へと入っていく。

と、それを引き止める少女——風羽。

「お待ち下さい！」

「？」

静かに振り向いた白空の目に映ったのは、恭しく畳に正座して頭を下げた風羽の姿。

「——、」

何かを言おうと口を開いた白空が言葉を発する前に、風羽が声を発した。

「お願いがあります。どうか私をあなた様の臣下にして下さい！」
「何？」

発せられた言葉の重大さに思わず眉根を寄せて殆ど疑問に近い問いの言葉を発する白空。

まさかこの小さな少女からそんな事を言われるなどとは、さすがの彼も想定外だった。

だが、それよりも《臣下》という言葉の意味の方が気になった。

「そなた……臣下」の意味を理解して言っているのか？」

臣下とは即ち、君主たる主に「一生の忠誠」を誓い、主の言葉は絶対として動く者達の事だ。

主が望むのなら命など簡単に投げ捨てる程の忠誠心を持っている。だがそれは、逆に言えば主の一言で命を投げ出す「覚悟」が必要とされると言う事。

（この小さな少女にはそれ程の覚悟があるというのか？）

口を閉ざした白空に、顔を上げずに、だが先程よりもはっきりとした声音で風羽が答える。

「もちろんです。」

「ならば何故……」

ならば何故そなたの様な子供がその様な事を言うのか？ そう続けようとした白空の声はまたもや風羽によって遮られる。

「分かっているからこそ言っているのです。私はあなた様に命を救

われた・・・ならば、救われた者に恩を返すのは当然の理。だからこそ私はあなた様の臣下になりたいのです。命を救われた恩は一生でなければとても返せる様な物ではありません。」

だからどうか・・・と続ける風羽に白空は言葉を発する。

「それ程の覚悟があるのなら、もう何も言わぬ。」

「本当ですか!？」

紡がれた白空の言葉に風羽の頭が一気にあがる。

「ああ・・・だが、私には既に二人、臣下がいるのだが・・・それでも好いのか？」

「え・・・あ、はい、もちろんです!」

予想外の言葉に少し戸惑いながらも賢明に言葉を返してくる風羽に、白空はゆっくりと肯く

彼は心得ているのだ。妖怪は己の信念に従って生きる者。他人がどうこう言ったところで現状が変わる事などあり得ない。

もちろん、力任せに追い出す事など白空には容易いが、この幼い少女にそれをする程彼は非道ではない。

「最後に・・・あなた様の名をお聞かせ下さい。」

再び頭を下げて言葉を発する風羽に、白空は静かに自らの名を紡ぐ――。

「白空――天狐てんこの白空。」

「はくあ・・・ではあなた様があの有名な天魔の大妖怪・・・」

白空の口から発せられた名前に驚きながらも、風羽は気になった事種族名について問う。

「ですが、その・・・失礼ながら天狐てんこという種族名は聞いた事が無いのですが・・・」

自分も妖狐一族の者だからある程度の種類は知っているのですが、困った様な顔をしている風羽に白空が言葉を発する。

「天狐とは、以前私が戦った者が言っていた言葉だ。」

「言葉？」

「ああ。」

どうにも納得がいかない、と言うふうには小首をかしげている風羽に言葉を続ける白空。

「私が司る力は天の力。故にその者が私の種族名を『天狐』としたのだ。」

「天の力……なるほど、そうだったのですか……」

納得した様に呟く風羽——だが、まだ疑問はあった。

天の力。それにもやはり、いろいろな種類がある。

自分達が使う風もその内の一つだし、その他にも雷や水と言ったモノもある。

もし——それら全てを使う事が出来ているからこそ、その戦ったという相手が『天の力』と言ったのだとすれば……。

「どうした？」

「え？ああ、いえ、何でもありません。」

少々空恐ろしい事を真剣に考えていた風羽は白空の声でハッとする……だが、もしも本当に先程の事が事実なら……白空は『神』レベルの力を持った化け物だ。

「……お強いんですね……」

「?……まあ、弱くは無いだろうな。」

あまり風羽の言葉の意味が理解できずに答えた白空だったが、正直自分が弱いと思っていないのは事実だ。

だからといって褒め称えられる程の力を持っているとは思っていないのも事実なのだが。

そう言えばこの御方は千歳を超しているとか……とまたまた恐ろしい記憶が蘇ってきたのを無理矢理途中で遮り、風羽は顔を上げた。

「……」

じっと自分を見下ろす瞳が不思議と優しいのを感じ、彼女は思った。

——この御方は本当にお強い方なのだ。
と。

本当に強き者は本当の〃優しさ〃を持っている者だ。

何時かもし誰にかも忘れた言葉が不意に頭を過ぎる。そして、自然にこの人こそ、そう言う存在なのだと理解する。

不意に顔の強ばりが説けた様な気がした。

「・・・・」

無言のまま次の言葉を待つ白空に幼き少女、風羽は誓いの言葉を静かに紡ぐ——。

「我らが妖怪、天狐の白空様・・・我が名は風羽、これより汝の御許に使える事を誓います。」

「・・・・」

無言で静かに微笑みながら差し出した白空の手を取り、そっと口づける風羽・・・・。

「契約成立。」

そっと完了の言葉を呟いた白空に、風羽は瞳を合わせ、言葉を発する。

——その幼くも整った顔に笑みを浮かべながら。

「よろしく願います、白空様！」

出会ってから初めて見る事が出来た風羽の笑みは、太陽の様だと白空は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1723s/>

妖怪軌道永理

2011年5月1日13時25分発行